

アート 探究

俳優のイッセー尾形と演出家の森田雄三が全国を巡り、地元の人たちと芝居を作って上演する公演「イッセー尾形とフツの人々」を始めた。用意された台本はなく、演じるのも大半が演技経験のない人たち。数日のワークショップだけで本番の舞台に立つ。そんな常識破りの芝居づくりの現場に立ち会った。

茨城県つくば市にあるつくばカピオホール。ここで六月末、全国公演の皮切りとなったワークショップが開かれた。前日に初めて出会った参加者同士が即席の家族を作り、森田の前で演じる。せりふも即興だ。「ああいい風宮だったなあ」。夫に扮した男性がタオル片手に現れる。すると「そつじうことはしません」。客席にいた森田から即座に声が飛ぶ。「年に何回か言うだろうけど、ここでは（特別な日ではなく）膨大な時間の方をやってみてよ」。

森田の演出を受けようと、家族に扮する参加者が次々と舞台に上がる。イッセー尾形も客席で舞台を見つめる。「自分の家の居間を思い出して」「テレビドラマのようにすべての感情を説明しない」。森田の言葉に普段の自分を再現すればいいのだと参加者は理解し始める。すると芝居がみるみる変わってき

舞台「イッセー尾形とフツの人々」



「舞台上はいやおうなくその人が抱えるものが見える」とイッセー尾形（中央、茨城県つくば市・つくばカピオホール）＝写真 渡辺信雄

うまさ捨ててリアルな芝居

た。参加したのは小学生から七十歳の男性まで約百五十人。学生アルバイト、会社員、教師、焼鳥屋の主人など肩書もさまさまだ。主婦の丸山みどりさん（47）は、「発声から始めると思っていたのでびっくりした。『実感したことすべてを語らないで』と言われたが、それが意外と難しくて」。

イッセーと森田は十年ほど前からこうしたワークショップを始めた。だが、全国を巡る大規模な試みは今回が初めて。「演

劇のポップアートをやりたいんだ」と森田は狙いを語る。

「スローな瓶など、現実にあるものを絵画の額に置いて

みようというのがポップアートの考え。それと同じように現実にいる人を舞台に置いてみると何が起るのか。そこに興味か



一般の参加者に呼びかける森田雄三

ある」。森田は絵画に例えて説明する。「こんなものは絵じゃないと言われても、やること自体がアートなんだ」。こうした考えは二十五年間、二人で練り上げてきた一人芝居で培われた。

一九七

一般人加え 日常に迫る

年、俳優養成所に入ったイッセーは、ここで演出家の森田と出会う。その後、イッセーは建設現場で働き、森田もサッシの取り付け販売の会社に就職したが、互いに金も時間も少ない。でも演劇の夢はあきらめきれない。そんな中で、二人は独自の一人芝居を作り上げた。

会社が倒産して建設現場に働く元社長、暇なパーテン、うだつの上からない営業マン……。イッセーが演じるのは社会で暮らすありふれた人々だ。「僕はきちんとした演技訓練を受けたいわけではないし、シエクスピアもアレヒトもチェーホフも

知らない。分かるのは働いている建設現場の人かシートからのぞいたパーテンぐらい。たとえ薄っぺらな人生でも人間。そういう人たちを舞台に上げちゃっていいんじゃないかと思った」とイッセーは振り返る。

習練を重ねた高い技量のある者が描き、鑑賞する側と描く側に明確な線引きのあった絵画。そこに軽やかに登場したポップアートは、絵画の概念を変えた。森田は「演劇も概念が変わっていい。『どなた、うまいだろう』と（演じる側が）言っているような窮屈な場所から離れたいんだ」。演劇の正道とは見られなかったこともある。「でも世間は認めていた。だってお客が入るんだもん」と森田は言う。

つくば市では参加希望者が殺到し、ワークショップを急ぎよ昼と夜にわけた。森田は「こんなに大勢の人が来て、これが演劇の改革でなければ何なんだ」と力を込める。歴史をたどれば不条理劇のベケットの登場など、既存の演劇に対するいくつかものアンチテーゼが演劇の可能性を広げてきた。プロの俳優と演出家が演技力と凝った演出でつくり上げる芝居らしい芝居。それに疑問符を突きつける彼らの舞台は、今を生きる演劇を模索する試みでもある。

本公演でイッセーは金髪のコロンビニ店員、ヨガ教師などに扮し、即興で芝居に加わった。にわか作りの演技者とのやりとりが引き締まり、日常の生活がくつきりと浮かび上がる。参加者の男性は終演後、「奇跡が起きたみたい」と笑顔を見せた。

公演は全国の公共ホールが連携する「公共ホール演劇製作ネットワーク事業」として開催され、今後、横浜、宮崎、福岡県新宮町、北九州、津、滋賀県栗東市、新潟を巡回する。

（文化部 関原のり子）